

放課後連・東京 第18回 学習集会 開催!

143名参加

# 子どもが本当に育つ放課後活動とは何か ～実践がサービスと呼ばれる時代に立ち向かうために～

2013年5月26日(日)に第18回学習集会(於北区赤羽会館)を開催しました。当日は143名の参加を得ることができ、盛況な学習集会となりました。

各加盟グループは、2012年4月から始まっている放課後等デイサービスへの移行を順次進め、ほとんどのグループがこの4月から放課後等デイサービス事業所となりました。そういった状況の中、運営面・活動面で変化のあるグループもありますが、私たちにとって、最も基本にあるのは「実践」です。「実践や父母との連携の大事さ」をしっかりと確認するためにも、今回の学習集会のテーマは「**子どもが本当に育つ放課後活動とは何か～実践がサービスと呼ばれる時代に立ち向かうために**」としました。現在の福祉施策では「実践」



は「サービス」と呼び換えられていますが、私たちが積み重ねてきたのは「商品として売り買いする」という「サービス」ではなく、子どもたちの成長・発達を権利として保障する「実践」

であると考えているからです。

まず、開会挨拶として放課後連・東京会長の村岡氏から発言がありました。村岡氏は、①放課後活動グループが補助金を受けていたような、都独自の福祉制度がこのままなくなってしまうということは、国の制度の不備や欠陥を補うという、自治体本来の役割を失うことにならないか、②「実践もサービス」という主張に流されると、実践は形骸化してしまわないか。また、親と職員との関係も、サービスの「利用者」「提供者」に分けられてしまわないか、と問題提起を行いました。

\* \* \*

## 第1部

は原田文孝先生(兵庫県立いなみ野特別支援学校・青野原訪問学級教員、全障研・兵庫支部所属)のご講演でした。テーマは「**本当の教育実践を求めて～私の歩みと授業づくり**」でした。原田先生は知的障害のある息子さんを持つ1人の親でもあります。講演の最初はその息子さんについてのお話でした。

子育ての中では、親として葛藤することもあるが、

《No. 96》2013年7月4日  
障害児放課後グループ連絡会・東京  
(放課後連・東京)

〒135-0041 江東区冬木6-20 こびあクラブ内  
TEL・FAX 03(3630)1363

お子さんから出てくる言葉から教えられることがたくさんあったとお話されました。息子さんが小さいころによく言っていた「ぼく好き?」「ぼくえらい?」という言葉からは「無条件に愛して欲しい、1人の人間として尊重して欲しい」という『人権要求』の表れ、現在の息子さんが口癖にしている「おこってる?」「仕事がんばった!」という言葉は「自分の力を認めて欲しい」という『能力要求』の表れとお話されていました。子どもから発する何気ない言葉から、子どもの本当の気持ち、願い(尊重して欲しい、認めて欲しい)を掴んでいくことの大切さを教えていただきました。

ご自身の親としての経験の後には、先生が実際の授業でどのような実践をされているのかについてのお話に入りました。

## ■『触れて欲しいけど・・・』に寄り添う



重症心身障害児の授業づくりをしている先生は、最初の実践例として、「顔に触れられるのが嫌いな石橋君」が、どのようにして「顔を触れるのが好き」になっていったのかについて「愛情文化」という文脈で丁寧にお話さ



れました。  
石橋君は顔を触れられるのが「苦手」で、顔の近くに

手を伸ばしただけでも顔をそむけるほどでした。それは、これまで医療的な処置で、顔にチューブなどを付けなければいけなかった石橋君の経験から、「顔に何かされると不快な気持ちになる」という経験が積み重なっていたからです。そこで、先生は絵本を使って、歌と一緒に「手にチュッ」「ほっぺにチュッ」という授業を展開しました。そうすると、石橋君は「嬉しいような、つらいような表情」をしながら、顔に触られることを受け入れたそうです。先生は「石橋君は『本当は触って欲しい』という気持ちがあったのではないか。大切なのは、その子が『どう感じるのか』ということ」と述べられていました。その子が表面的に出してくる表情などの奥にある気持ちに寄り添いながら、「どう感じるのか」というプロセスに着目した支援の仕方は日頃の活動の中でもしっかりと頭に入れておきたいことだと感じました。

## ■ 「生活文化」を伝えることの大切さ

次に先生は「生活文化を伝えることの大切さ」についてお話しされました。子どもの生活実態の中から文化をどのように伝えていくのかという実践でした。

授業の内容は「涼しさを感じる」というもので、実際の授業の様子を映像で流しながら解説していただきました。

授業ではまず、「涼しさ」を感じるために、「暑さ」

を感じることから始まります。教室を出て、屋外で暑さを全身で感じます。十分感じたところで、教室へ戻り、扇風機の風を感じる授業へと展開していきます。まずは弱い風から始めます。次に中ぐらい、そして最後に強い風を感じます。風が来る度に、「風が吹いてきたよ～」と共感的声かけをすると同時に、「風に飛ばされる～」と全身を使って風を感じます。その後、風の強さを弱くします。すると、子どもは弱い風をなんとか察知しようととても集中した表情に変わります。風が顔に当たると『風が来た!』と表情で教えてくれていました。それに対して先生は「風が来たね～」としっかりと共感していきます。細かな感覚に注目して、実践に落とし込んでいく過程がよくわかりました。

映像の後に、先生は『「2人でその風を感じる」ということが大切なのです』と述べられていました。「本人－風－支援者」という「3項関係」の中で「文化の世界」を作り出し、そこに入っていくことで、子どもに生活文化を伝え、成長・発達に繋げていくという意味です。日々の活動の中でも、3項関係を作っていくことで、「放課後の文化」を伝えていけると良いと思う内容でした。また同時に、「スローな時間の体験も大切」「スローは関係性の概念で、『ゆっくり、じっくり』と向き合っていくことが必要な」と述べられていました。いつも忘れがちな「ゆっくり、じっくりと子どもと向き合う」ことを再確認させていただきました。

## ■ 生活の中で「ストーリー」を伝える

次に顔に触れられることに抵抗感を感じてしまう佐藤さん（成人されている方）とじっくり向き合った「髭剃り授業」の実践を教えてくださいました。

佐藤さんは成人されていますが、発達年齢としては、8、9か月の段階です。その段階の力を駆使しな

がら生活をしていました。佐藤さんは他人に触れられることに対して強い抵抗感を感じてしまいます。おしめ交換、着替えの際には大きな声を出して怒ったり、手を噛んだりして表現をします。原田先生は、この表現は、人権要求、能力要求、愛情要求が根本にあると捉え、実践を組み立てていられました。こういった捉え方は、重心のお子さんであっても、そうでないお子さんであっても普遍的な価値があるものであると感じました。

発達の本当のねがいを汲み取りながら原田先生が具体的に実践された例として、佐藤さんの「髭剃り授業」を見せていただきました。佐藤さんの髭剃りへの抵抗感は強く、目の前に置かれた水をはった桶を、払いのけてこぼしてしまうほどでした。原田先生は、「佐藤さんの生活体験が限られており、髭を剃るという行為が断片的でわかりにくく、佐藤さん自身で意味づけしにくいものになっている」と考えます。生活の中から出てくる要求に対して、佐藤さんが「もっと、じっくり、ゆっくり体験したい、かかわってほしい」「体験したことを意味づけたい、意味をわかりたい」と思っていると捉え、佐藤さんの抵抗感の根本にある「ねがい」に寄り添います。授業では、そういったねがいを土台にして、「生活の流れ（ストーリー）で意味を伝える」ということをテーマとして展開されました。おしぼりで顔を拭くところから「ゆっくり、じっくり」と佐藤さんに伝えながら進めていきます。ゆっくりと伝えていくことで、佐藤さんもストーリー、意味づけをする余裕が生まれます。そして、十分な時間をとって電気カミソリで髭を剃ることを伝え

えます。映像では抵抗感も少ない様子で髭を剃られていましたが、佐藤さんの安心



感をここまで引き出せるようになるまでは、本当にゆっくり、じっくりと関わる必要があるだろうということがよく見て取れました。原田先生の実践はここで終わりません。髭を剃った後に、鏡を見て、「男前の自分を感じる」という実践に繋がっていきます。佐藤さんの言葉理解では言葉の意味は伝わらないかもしれないけれど、「言葉の理解というよりも、(言葉のもつ語感で)肯定的な雰囲気を出すことが重要」という捉え方で、常に声をかけて「男前な自分」をじっくり感じられるようにします。佐藤さんが自信を持って鏡を見ている表情がとても印象的でした。

## ■ 本当の教育実践を作るには

3つの教育実践をお話いただき、最後に先生は「生活の一コマ」を意味づけ(ストーリー)していくことが教育実践には求められるということを踏まえて、「彼らに合わせたところから、実践のイメージを作っていくことが大切。学校に子どもを合わせていくのではなく、子どもに合わせた学校作り、授業作りが大切」と述べられていました。私たちの普段の活動でも、「子どもに合わせた事業所作り、活動作り」が求められていることを改めて感じさせて頂いた言葉でした。

### \* 質疑応答 \*

Q:「他人だからできること」とは?

A:客観的に見られるということ。私の場合で言うと、客観的に見られないというか、頭ではわかっていても、実践面ではできないことがある。親として、子どもの生活に日々関わると、やはり腹を立ててしまったり、横目で見えてしまったりしがち。そこは親としてとしか言いようのない部分。でも、他人だと待ったり、指導したりということが出来る。それが

できるのは他人であるから。ゆとりを持った程良い距離を保てる関係とも言える。親はグッと近づいてしまったりするので。

## 第2部

は、佐藤優子さん(よりみちくらぶ・杉並区)の実践報告でした。

テーマは「受けとめられ、納得すること」でした。

## ■ 試行錯誤の日々から得たこと

昨年度で卒業した美紀さん(仮名)との活動作りを主題にした実践でした。美紀さんは盲・知的の重複障害を持っており、そういったお子さんを受けるのはよりみちくらぶさんでは初めてでした。佐藤さん自身もどのような活動を作っていけるのか手探りで関係を作っていました。

通所してきた初日、美紀さんは施設の入り口でびたりと止まり、中に入ろうとしませんでした。徐々に活動に入っていくうちに、美紀さんが音楽を聴いたり、「型はめ」のおもちゃで遊んだりするのがとても好きなことがわかってきました。特に、型はめは指の感覚だけで完成させ、彼女が得意な遊びになりました。そのような活動の中での楽しいことは見



つけられてきましたが、一方で、「活動終了後に全く帰れなくなる」という姿も出てきました。

佐藤さんはこの美紀さんの行動

にどのように支援していけばいいのか悩まれたそうです。帰ることを伝えると、美紀さんは知っている限りの拒否の言葉を発し、最後にはズボンを脱ぐという場面もあったそうです。こういった状況の中で、佐藤さん始めスタッフの方々は、美紀さんが落ち着ける環境を設定していくという支援をします。周りにいる友達にその場から移動してもらい、言葉かけはせずに、静かな環境を作ったそうです。しかし、それでも靴下をはく段階になると、また嫌な気分がよみがえってくるようで、靴下を履いては脱いでという作業を何度も繰り返しました。佐藤さんは支援の方法を探り続けます。ふとした会話の中から、「待ち合わせ」というキーワードを思いついた佐藤さんは、「帰る」という言葉ではなく、お母さんとの「待ち合わせ」という表現を使うことにしました。すると、機嫌良く帰り支度にとりかかる姿が見られるようになりました。ただ、それでもやはり帰れないことがありました。活動時間の短さなど色々なことを考えると、「活動時間内に帰るなんて無理」と思ったこともあったそうです。でも、美紀さんと佐藤さんの関係が深まるにつれて、「そんなことはない」と思えるようになってきました。

## ■ 好きなこと・安心・自発

美紀さんが高校生になると、下校時間が遅くなり、これまでよりも活動時間が短くなってしまいました。美紀さんの好きな音楽を聴く時間も短くなってしまいました。そこで、佐藤さんは思いきって音楽の時間をやめて、「型はめ」をしながら会話を楽しむことを大切にする活動をすることにしました。こういった判断はスタッフとしては難しいものです。このときもスタッフ同士で議論をたくさんしたのだろうと想像します。

この型はめをしながらの会話を中心にした活動の中で、美紀さんから出てくる言葉に対して「そうですか。」

## \*活動報告\*

### ■ 3月

- 1日(金) 障都連・教育関係部門会議
- 9日(土) 障都連・第4回代表者会議
- 10日(日) グループ連絡会・総会
- 14日(木) 事務局会議
- 18日(月) 定例会:「障害者虐待防止法」学習会(講師:野沢和弘氏(毎日新聞論説委員))
- 28日(木) 都議会本会議において陳情「意見付採択」

### ■ 4月

- 12日(金) 障都連・教育関係部門会議
- 18日(木) 事務局会議
- 21日(日) 障都連・第40回総会
- 22日(月) 定例会
- 25日(木) 成人部門連絡会
- 29日(月) グループ連絡会・第43回総会

### ■ 5月

- 7日(火) 都福祉保健局に対して障害包括補助事業に関する要望書提出(郵送)
- 12日(日) グループ連絡会・役員会
- 16日(木) 事務局会議
- 20日(月) 定例会
- 26日(日) 第18回学習集会

### ■ 6月

- 11日(火) 障都連・要請行動検討会議
- 12日(水) 障都連・都福祉保健局障害者施策推進部長との懇談
- 13日(木) 【都議会民主党】、【都議会生活者ネット】に対して、都議会選挙公開質問状送付
- 14日(金) 【都議会自由民主党】【都議会公明党】【日本共産党東京都議団】に対して、都議会選挙公開質問状送付
- 20日(木) 事務局会議
- 21日(金) 障都連・対都要請行動(福祉保健局・教育庁)
- 23日(日) 全国放課後連・第16回研修会(埼玉)
- 24日(月) 定例会

て、佐藤さんは美紀さんとの関係の基礎になった「そうですか」という「受けとめる言葉」の大事さを再認識します。活動の中で常に頭に置いておきたいことだと思いました。

## \* 原田先生の講評 \*

実践報告について原田先生から講評がありました。原田先生は「人格同士のぶつかりの中で、大人の姿勢を子どもたちは感じる」と述べられました。美紀さんは活動の中での葛藤・大人とのぶつかり合いの中で、大人(佐藤さん)の「姿勢」を感じていたのではないかとということです。佐藤さんが「そうですか」という「受けとめる姿勢」を返すことで、美紀さんの中に安心感が生まれて、良い関係性を築くことができたのではないかと思います。そういった他者との関係が「葛藤からの立ち直りを支える」ものとなっていきます。美紀さんは佐藤さんとの関係を支えにしながら、「帰る」という行動への葛藤(こころの揺れ)に対して納得できる筋道を立て、立ち直っていきました。

原田先生の講演と合わせて考えると、「ゆっくり、じっくり」と子どもたちの気持ちに寄り添っていくことが、子どもたちの「心の支え」になるとののだと思いました。

## \*お知らせ\*

### \*村岡真治さんの本が出ます！\*



放課後連・東京会長の村岡さんが著書を出されます。『揺れる心が自分をつくる～放課後活動だからできること』(全障研出版)です。

是非ご覧ください！

「あら～」「そうなんだ～」といった「受けとめるような言葉」を返すと、それで安心をして、少くくらい嫌な気持ちになっても大きく崩れることなく、気持ちを立て直すことができるようになってきました。これまでは1時間以上かかることが珍しくなかった帰り仕度が、高校生になった頃から5分程度になりました。そこにも、佐藤さんの言葉選びの工夫がありました。「帰る」という言葉ではなく、「美紀さん、もうちょっと前へ」という言葉を使うようにしました。これは、美紀さんが周りからの声かけを元にして、手で触れて自分の場所を理解しながら、前に進むうちに玄関だと自分で気づくという流れが美紀さんの中で生まれるということを知っての言葉です。玄関まで来ると、佐藤さんは美紀さんに「できる？」と聞きます。これは『靴下を履くのはできる？』ということです。その言葉を聞くと、美紀さんは「できる！靴下履く！」と返事をし、そして帰っていくようになりました。

佐藤さんはこれまでの美紀さんの姿から、「彼女には『帰る』という言葉は必要ではなく、必要なのは『納得できる手順』で活動を終了して、おのずと帰るイメージが思い浮かぶ言葉かけだった」と振り返ります。本人が納得する筋道を作り、「自発的に自分の姿を選び取るという流れを見出し、本人の揺れ動く気持ちに寄り添いながら支援をしていく」ということが本当に大切な考え方なのだと再確認できました。

## ■ 美紀さんから教えてもらったこと

昨年度の3月に美紀さんは卒業されました。その最後の活動である「卒業コンサート」は美紀さんにとって苦手な大きな音が響いています。それでも、最後には入ることができました。佐藤さんと築いた関係が美紀さんを支えていたのだと思います。そし